

現代英米文化学会 会報

#005

Published 8 November 1990

Not for sale

題字は勝浦先生

【現代英米文化学会第74回例会ならびに忘年会のお知らせ】

今回は日本大学歯学部にて開催致します。

期日：12月1日（土）

時間：15時より

会場：日本大学歯学部3号館第7講堂（3F）

注意！ 前回と場所が異なりますので地図を参照のこと

研究発表： W. S. モームの人生観
——モームにおける美の観念の推移をとおして

村岡 昌代 （昭和女子大学大学院）

なお、終了後に忘年会を兼ねた懇親会を準備致しました。当日夕方までお忙しくて例会に出席できない方は、懇親会のみのお参加でも結構ですので御遠慮なくお申しつけください。

懇親会・忘年会

会場：神田小川町「アミ」 電話 03-291-0247

（学会名で場所の予約を致しております）

費用：4000円



☆学会からのお知らせ☆

<STEP BY STEP 改訂作業終る>

数人の会員にお願いしてありました桐原書店の『英語長文のSTEP BY STEP』基本編、標準編、発展編3巻の新訂版ができ上がり、見本を配り始めました。執筆の方々には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。これで学会の運営が楽になることでしょう。

<フロッピーディスクでの投稿ができるようになります>

日本語ワープロのフロッピーディスクを使っての投稿(論文、ニューズレター等の原稿)を受付けることになりました。ご使用の機種を機会のあるごとに編集委員にお申出ください。当該機種からの組版用変換等ができるか検討致したいと思えます。

<『現代英米文化』第21号の投稿締切迫る>

次号の『現代英米文化』の投稿締切は平成2年11月末日となります。投稿される方は、お名前、所属、抜き刷りの希望部数(指定が無い場合は30部を自己負担することとなります)を表紙に記入して、佐藤治夫まで郵送してください。

<東京都在住の会員の電話番号が変更になります>

平成3年になるとすぐに東京都内の電話番号の桁数が1つ追加になって総て変更されることとなります。変更が生じた会員は平成3年1月末までに佐藤治夫までご連絡ください。住所録などの改訂作業に必要となります。ご連絡がない場合は、NTTの統一方式で改訂をいたしますので御了承ください。

<会員の動き>

—— 新入会員 ——

新しく会員が三名入会されました。

—— 出版 ——

新妻 紘

『コミュニケーションの授業——ティームティーチングの指導法』

三省堂出版

1、500円

☆編集部からのお知らせ☆

五味田先生の「英国留学こぼれ話」に続いては、須田理恵先生の「キク科の花々」の連載(?)が始ります。今回は「Chrysanthemum #1」というサブタイトルがついていて、皇室の行事にも関連するのでしょうか?

キク科の花々

Chrysanthemum #1

須田 理恵

秋真盛り、菊薫る季節である。菊というと何か日本古来の花のように昔から慣れ親しんできたような気がするが、もともとは中国から奈良時代の初期に日本に渡って来たらしい。

それにしても日本人と菊が切っても切れない仲であり、日本を象徴する花となったのは何故であろうか。平安の頃、皇室を中心とする宮廷園芸でごく限られた栽培(平凡社大百科事典)であったものが江戸時代の庶民の間に広まった観賞の技術の発展とともに菊人形や菊細工、菊合せと称されるものが普及した理由によるのであるのだろうか。

その江戸庶民の菊造りは現代でもその片鱗を昼下がりの薄暗い露地裏やモダンなショーウィンドウの片隅に直径20cmもある巨大な厚物(幅の広い舟底弁が重なり合って盛り上がった花形で一般的なもの——平凡社大百科辞典)から、かんざしのように垂れ下がったものまで、少し気を付けて観察すると至るところに豪華で眩い菊の品評会が見られるのである。これが日本人の菊に対する親しみ用の顕れでなくて何であろうか。それに、菊には日本人が特に好む多種多様の利用法がある。切花、鉢物としての観賞用の他に料理用、又は料理の飾りつけとしても用いられている。

ところがこのように利用価値のある万能薬のような菊が「花」としての価値となると、バラやカーネーション程、愛でられてはいないのだ。「花の生命は短く、なで、…」と歌われる花としての価値は、弱々しく可憐であることで詩的風情を呼び詩人の感興を喚起するのだが、丈夫で長持ちという中年オバサンのような花は何となく心の底では忌み嫌われるものらしい。アメリカで同じアパートに住んでいた Dichan(オイチャン)(この人は中年男性でなく、20代前半の女子学生であつた)という奇妙な名前の子が「菊は大嫌い。バラやカーネーションは大好き」と言っていた事を思い出したが、これは一つのカルチャーショックなのであつた。彼女はテレビドラマの戦闘場面にも拒絶反応を示し「どうして人はピストルで殺し合いをするのだ。死んだ人が本当に痛痛しい、かわいそうだ」と言っておーいと泣く全く単純至極な人間であつたが、確かにテレビであつても人は殺し合いを放映してはいけないのかもしれない。本当に純粹で無垢な人間はそれによつて傷ついてしまう。まして5才や6才の子供にとって人殺しを目の当たりにすることで如何にその一生に反映することか、その影響を考えると空恐ろしい気がしたのだ。反面教師とは物事の分別のつく年頃から有効なのではないだろうか。考え、四六時中テレビを見ている子供たちはどのように成長して行くのだろうかなどと考えたものだった。

それはさておき、菊というと菊花紋、皇室、貴族等を想像する私の頭の中にあつた固定観念を打破してくれたのはオイチャンの自由な精神(こころ)であつたが、どうもこれは平安の女傑、紫式部と共通する精神であつたらしい。

孫引きであるが、「紫式部日記」に「行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよつくりみがかせ給ふ。世におもしろき菊の根たづねつつ掘りてまいる。色々うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植えたてたるも、朝霧のたえまに見わたしたるは、げにも老もしぞきぬべき心地するに、なぞや、まして、思ふことのすこしもなのめなる身ならましかば、すきずきしくももてなし、若やぎて、つねなき世をもすぐしてましめたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。．．．」

とあるが、直観で解釈すると、黄菊は英語の the Golden Age を象徴し、その神しさを見るにつけてもそのように晴れやかに、思い煩うこと無く年を感じずに生き長らえることができたらよいが、それとは裏腹に悲しいことばかりの身の上が苦苦しく、苦しい人生であることよ。このように、菊の持つメランコリックで憂鬱な一面、その豪華さ故により強調される地道な人生という ambivalent (両義的) な意味が強調されている。またまた平凡社大百科辞典によれば、「このように純粹に個人的で自由不羈な態度をもってキクを眺め、いやしがたいメランコリーの気分に入った日本人は紫式部が最初である。その意味で、紫式部は真に＜日本的なもの＞の発見者第一号であった」とある。

紫式部のこのような、既成概念に囚われない自由な、菊に対する感じ方が外国文学の作品中でどのように題材とされているかは次号にゆずることとする。



発行責任者 佐藤治夫
現代英米文化学会編集委員会
佐藤治夫、石原 強、相良英明、大桃道幸
石川育二、中村 豪、宮本正和

<投稿時の宛先>

通常郵便

郵便番号 101

千代田区神田駿河台 1-8-13

日本大学歯学部 佐藤英語研究室内

現代英米文化学会編集委員会 宛

電子メール

[DOMESTIC]

Nifty-Serve NAA00761 / PC-VAN XKF89898

[FOREIGN]

CompuServe 76662,112 / GENIE H.SATO